



雨 降 花

Studio ***46

「クセなんだよな.....
隙があると、殺したくなるの」

雨女という妖怪は実在するが、
雨男はどうなのだろうか。

目次

Common Erasure	
.....	2
.....	3
.....	4
.....	5
Before Crisis	
.....	8
.....	9
.....	10
.....	11
.....	12
.....	13
.....	14
.....	15
After Domination	
.....	18
.....	19
.....	20

Common Erasure

最近立て続けに悪い夢を見るので、そろそろ何か起こると思っていた。
いつも仕事をしている駅前に向かいながら、豪雨に叩かれる彼はうんざりした気分だった。
「何でまたいきなり……雨になるかな……」
雨雲のせいで空は暗いが、遠くの山は青々と晴れている。
外に出た瞬間からずっと、後ろに続く二人組がいる。楽しそうに話す声が耳につく。
溜め息をつく彼の前方、通り雨にめげずに歩きスマホをしている男が目についた。ホスト風の服装は、彼らの歩くローカルな道にはあまり合っていない。男もずぶ濡れの彼をちらりと見て、顔をしかめたように見えた。

山沿いの安アパートから町に出るまでは、いくつも住宅街を抜けなければいけない。
通ってきた道で、珍しい^{たにうつき}谷空木を植える家を見かけた。「雨降花」なんて異名の木が生えているから、この近辺にはきっと雨が絶えないのだ。
ちょうど彼の目の高さで、花冠の群れが突き出ているので、一房折って手に取った。家主が見ていたら怒るだろうが、一般道を侵蝕する植木はよろしくない。
谷空木の鮮やかな桃色の花はいつも、雨の時期に限って見られる。だから彼も、植物のことなんて全く詳しくないのに、名前を知っていた数少ない木だ。

何しろ彼は、雨の日にしか生きていない。雨女という妖怪は実在するが、雨男はどんなのだろうか。
彼がいる限り雨が降り続ける世界は、彼を「雨の神」とする下らない時空だった。

ここ数日は本当に雨続きで、やっと晴れ間が見えたのが今朝の話だ。
儂い太陽だった。同居人が手洗いの洗濯物を干そうとしていたのを思い出す。
「あ、しまった……着替え、もらっておけば良かった」

彼が外で稼ぐ代わりに、家事はもっぱら同居人が頑張っている。といっても彼らの生活に必要な事は人間程多くないので、同居人が趣味でしているようなものだ。

彼の頼みで高校に通う同居人は、先月から体調が悪い、とよく学校を休んでいた。元々朝が弱いらしく、今朝は辛うじて起きた後に、登校直前に寝付いてしまった。

彼も最近夜が遅く、悪夢にうなされるので、昼近くまで眠ってしまった。その結果がこの、土砂降りの中の街歩きだ。

彼自身は、濡れ鼠になるのは慣れている。彼が行く先は全て雨になるので、傘を持つのが面倒なのだ。

しかし水を滴らせながら下宿に上がろうとすると、同居人が文句を言う。この国に降る雨は汚れているので、匂いが悪いのと、後で掃除が大変らしい。

けれどもう、同居人が文句を言うこともない。今日派手に部屋を汚しているのは、他ならぬ同居人だ。

血まみれになったフローリングというのは、どうキレイにすればよいのだろう。掃除する気なんて全くないが、他人事のように彼は、雨滴に叩かれながら考えていた。

最後に同居人が動いていたのは、朝にごそごと洗濯物をいじっていた時だ。

彼が先程目を覚ますと、横向きに蹲る同居人から赤い小川が静かに湧き出していた。

何てことだ。と驚きながら、自分を見ると真っ赤だった。右手と寝巻に確かな返り血。鏡の中には青い顔に似合う、冴えない銀髪の自分がある。

その銀色を見て、またやってしまった。彼は咄嗟に、そう思うしかなかった。

「クセなんだよな……隙があると、殺したくなるの」

銀髪な自分の欠点を知っている彼は、なるべくそれを抑えて生活してきた。けれどヒトには誰しも、やらかしてしまう瞬間がある。

咎められてもどうしようもない。彼はそういう生き物なのだ。

雨の神なので生き物でもないかもしれない。神だから別に逮捕される心配もない。それでも妙に残念で、あのままその場にいたくはなかった。

同居人のことは気に入っていた。だから一旦、現実から逃げようと思ったのだ。

時間を置けば大体、彼の場合は何とかなってくれる。

だから気軽に、同居人も殺してしまうのだろう。洗濯物をどうにかしてくれるまでくらい、待てば良かったと心が痛んだ。

前方のホスト男はまだスマホを見ている。妙にニヤニヤと笑いながら、駅に行く彼の前方で、いつまでも不自然な姿で歩き続けている。一度顔を上げて彼を一瞬見たが、それ以外はずっと同じ体勢のままだ。

彼の妹はスマホを持たされたが、彼は電化製品が苦手だ。触ったこともないと言うと、大概の人間には驚かれる。

先刻からずっと握り締めている谷空木のように、生き物の匂いがする方が彼は好きだ。特に植物は雨を喜び、彼の存在する意味を強める。彼自身は、雨が嫌いであったとしても。

雨に濡れることは別に悪くない。通りゆく人の顔を見ずに俯いていられるし、小走りにしても不自然さがない。赤々と汚してしまった両手も洗われていく。

ずっとついてくる後方の二人も、話す内容は雨に消されて聞こえなくなってくれた。

ここまで濡れると、袖の短いTシャツと黒いジーンズがべたべたとまとわりつくが、それが気持ち悪くなるのは雨がやんだ時だ。降っている間はシャワーのようなもので、要するに気の持ちようの一つなのだ。

「やだな……これがやんだらまた、俺に戻るのか」

雨の神の彼がここにいるのは、雨が降っている間だけだ。過ぎ去ってしまえば、残るのはただ、同居人を殺した自分という現実のみ。

彼はきっと、困り果てるだろう。それを思うと笑いが堪えられなくなってきた。
「やっぱり……勿体なかった、かな……」
もう歩き出してしまったので、思い返しても仕方がない。
雨はますます強く彼を打ち始め、空も黒ずんでいく。
闇の中を進むことは彼には慣れっこで、道なんてとっくに探すのはやめている――

後方にいたはずの二人の気配が、不意に消えた。
前方のホスト男がスマホをポケットにしまった。ずっと片手でさしていた傘を閉じる。
立ち止まり、くるくる傘をたたみ、駅のコンビニに傘を持ったまま入る。
男が彼の前にいる風景は終わった。すれ違った時、男の傘が見えた。真新しい安物傘は綺麗にたたまれ、全く濡れておらず値札がついている。それを男はレジに渡し、お金を受け取って傘をコンビニに返す……。
旅は道連れ、名残を惜しむように男の姿を追っていたら、駅の入り口から妙に明るい声がかかった。
「――あ！ どこ行ってたのさ、ツバメ！」
小さな改札と駅前商店街の分岐点で、商店街の出口側に声の主は立っていた。
濡れた傘を一つ腕にかけ、もう一つ大切に濡れていない傘を抱える、学生服の青年……彼が家を出るまでは、床を赤く汚していたはずの同居人が。
「夜勤お疲れ！ 今日は大サービスで、迎えに来てあげた汐音ちゃんだよ！」

……つまらないな、と。
破顔しながら駆け寄る同居人の姿に、彼は一度だけ、細く息をついたのだった。

Before Crisis

やましなつばめ
山科燕雨はその時、控え目に言って、強く戸惑っていた。

内心の動揺は、直感の鋭い同居人にはいつもすぐに悟られる。下手に見目を取り繕うより、ツバメらしくあるのが正解だろうと彼には思われた。

駅前商店街の端で、渋々傘を受け取りながら、彼は不服さを満面に浮かべた。
「何で……汐音が、ここに？」
「だって雨降ってるじゃん。オマエいつも濡れ鼠だけど、あれ掃除大変なんだぞ」
「でも、こんな時間に……大体こんなの、通り雨だろ」
「だーめ！ オレも夜型なんだから、この時間は動きやすいし」

でも、と同居人——汐音は、自分の傘を肩にかけて、てへへと罪のない笑顔を見せた。
「確かにそろそろ、眠くなってきちゃった。ごめん、これ、今日も高校休みたい感じ」
「……言うと思った。最近汐音、さぼりすぎだろ」
「あははー。猫羽ちゃんもいつも寝てるけどさ、高校の授業ってオレにはひたすら暗号朗読だよ。解説される日は永遠に來ないこの気持ち、わかんないかなあ」

雨天で肌寒い未明でも、朝っぴらから陽気な汐音に、ツバメはつくづく苦笑いを浮かべた。

「それにしても、ツバメ……その花、何？」

働いていたはずの商店街の中からではなく、外から現れた彼。握る谷空木の一房に、汐音が鋭い蒼の目を丸くする。

「今日、花屋の店卸しだったっけ？」

「違うよ。ただ単に——キレイだったから」

曖昧に笑う彼に、何処で咲いてたの？ と、しきりに首を傾げる汐音だった。

最近ツバメは、店卸しといった夜間バイトの方が割がいいと知って、夜に留守にすることが多くなった。代わりに朝は寝てしまうのだが、起きたら汐音も寝ていることが多い。今までは共に早起きして、汐音を高校に送り出していたが、二人して生活パターンを崩してしまった。

今日はまだ、高校に行くには早過ぎる時間で、雨の中を共に帰宅するしかない。「コンビニにはさすがに、花瓶、売ってないよねえ。売ってても高いだろーな〜」

一応駅の隣のコンビニに入ってみたが、商店街に比べて随分と割高なカップがあったのみだ。ツバメのポケットにある日当も心許なく、諦めてそのまま帰ることにする。

傘のないツバメを迎えに来た汐音は、いつ入手したのか長靴まで履く武装ぶりだった。「学生ズボンは濡れやすいの。オマエみたいに七分丈とかできないの、これ」「でも、わざわざ水溜り歩いてないか、汐音は」

並んで歩く汐音のはしゃぎようは、嫌でも伝わってくる。普段は高校と食事探し以外引きこもりなので、ツバメと出かける時はいつも楽しそうに見えた。

「せっかく長靴なのに、フツの道歩く方が意味わかんない！」

汐音の楽しげな声に、さっきから後ろを歩いている者——ホスト風の服装でスマホを手にする男が、一瞬顔を上げて彼らをじろりと見た。

彼らが歩く住宅街にそぐわない男は、帰路が似ているのか、コンビニを出た辺りから同じ道を来ている。ニヤニヤと笑いながら、ひたすらスマホの画面を見ている。

塀が多い道に入ると、汐音がにわかに嘆声をあげた。「——あれ？ これキレイ。ツバメのと同じ花じゃない？」「……………」

安っぽい低いフェンスを越えて、道路に一本、枝の突き出た植え込みがあった。雨にも負けない鮮やかな桃色の花が、いくつも所狭しと競って咲きほこり、花卉の僅かなグラデーションを透明な水滴が惹きたてている。

駅からもう大分歩き、雨も少し弱まってきた。遠くの山を見ると晴れ間も見えており、彼らはそこで立ち止まった。

「何て花なんだろ？ 駅前でも植えるくらいメジャー？」

わいわいと騒ぐ彼らを追い抜き、ホスト風の男が、彼らとは違う道に曲がる。

男は彼らを見て顔をしかめていた。明け方のローカル道にそぐわない学生、しかも類を見ない美青年の汐音を連れる金髪のツバメに、何か思うところがあるようだった。

「……正確には木だよ。田植え花って言われることもあるみたいだけど」

「え、何それ。何でツバメ、そんなこと知ってんの？」

突然ぐっと、花の方から振り返った汐音が、彼の顔を間近で覗き込んできた。

これは確かにまずかった。道楽者の生活をしてきて、人間界について無知な山科燕雨が、この時期に田植えがあるとは知るわけもない。

商店街の人に聞いたと、曖昧に笑って咄嗟に答えると、汐音はふーん、と端整な眉間に僅かに皺を寄せていた。

また雨が強くなってきたので、どちらともなく歩き始める。

道端にぼつりと顔を出した谷空木が、遠ざかる彼らを静かに見送っていた。

山を背にする二階建てのアパートで、彼らの部屋は二階の端にある。外階段を上がり、汐音が鍵を取り出す後ろ姿を、彼は不思議な心持ちで見つめた。

ここまでは焼き直しに過ぎない。これからあの赤いフローリングが現れるのだ。

しかし困ったことに、彼の記憶は非常に断片的だった。山科燕雨がどうして凶行に及んだのか、彼の責任とわかること以外、全く詳細を覚えていない。

ドアを開けると、見慣れた古い八畳一間が、汐音の肩越しに広がっていた。

「わ！ 何これ、ヒドイ匂い！」

驚く声には切迫感がない。それもそのはず、そこにあるのは至って日常の光景だった。

「……漂白するなら、窓、開けていけよ」

山側の壁には、ドアからキッチン、シャワー、トイレが順に並び、キッチンの向かい、窓側の壁の角を大きなタライが占拠している。汐音が家を出る前に浸けたと思われる白い学生シャツが、塩素という独特の匂いを撒き散らしていた。

「だって雨降ってたしいー。そもそも、誰もいないのに窓開けてたら不用心じゃん？」

彼らの狭いワンルームに、バルコニーという便利な場所はない。当然ながら、洗濯機なんて洒落たものもない。置き場がそもそも、一階の共有スペースにしかない。

「これ、替えが一つだけなんだから。まめに洗わないと、キレイな白は保てないんだよ」

汐音の普段着はほぼ学生服で、後は寝巻があるだけだ。

ツバメも似たようなもので、人間のように汗をかかない体で、そこまで服が汚れることもあまりないが、シャツの白さにはこだわりのある汐音らしい。

「ツバメのシャツも、はい、パス！ 朝の内に洗っとくから」

店卸しだと汚れたでしょ！ と、短い袖を掴んで引っ張る。

体が傾いた拍子に、タライの横にある全身鏡が見えた。汐音に後ろから右肩を掴まれ、金髪をかくツバメが映っている。

半ば無理やりに服を引っぺがされたので、寝巻である灰色の作務衣に着替えて布団を敷くと、腕まくりしてタライに向かう汐音が嬉しそうに笑った。

「はい、おやすみー。オレもこれ終わったらすぐに寝るよん」

和室に慣れているツバメは、いつも床の布団で寝るが、汐音はこの部屋唯一の大型家具、三人がけソファで寝ることが多い。床に布団を二つ敷くと狭いというのが言い分だった。

ここまでは特に、何の目立った変化もない。

いつもつけているチョーカーを外して、枕元の壁にかける小物入れの鉤に引っかける。そして枕に頭を埋め、タオルケットをかぶったところで、ツバメの記憶は闇に落ちる。

それでどうして、次に起きたら、タライのあった場所に汐音が転がっているのだろう。ここからそうなるはずの部屋の風景を思い返しながらか、彼は黙って黒い目を閉じた。

人外生物にとって、命などごく軽いものに過ぎない。

気まぐれに弄び、結果が気に食わなければ、忘れればいい。特に人外生物同士なら、殺し合おうと咎めなどない。

更には彼は、「やり直せばいい」。「時」の名を持つ彼には、それができる。彼はそういう生き物なのだ。だから気軽に、唯一無二の相方も殺してしまうのだろう。

時を渡る雨の神。彼がこの人間世界に干渉する時は、かつて彼だった者に憑依する。

山科燕雨は、^{うつきぐれ} 椴時雨が養子に行って得た名前だ。けれど雨の神たる今この彼は、山科燕雨にはなっていない。かつて「神隠し」にあった椴時雨が未来になる可能性のあった者、それが山科燕雨だ。

だから時雨は、ツバメに憑くことができる。金髪の青年ツバメと、銀髪の少年時雨、二人の違いはそれだけだろう。

ツバメの意識が眠りにつくと、時雨にとっては最も体を使い易い好機となる。ツバメからすれば、悪い夢の時間としか言いようがない。でもそれは時雨にとっても同じだった。

しばらくしてから、ぐしゃぐしゃとシャツを手洗いしている汐音が不意に話しかけてきた。

「あのさー、ツバメ。独り言だけど、こういうのって、思ったよりもずっと楽しいよねえ」

視線はあくまで洗濯物に向けて、タライの後ろにしゃがむ汐音。幼げな笑顔は、安らかそのものと言って良かった。

「猫羽ちゃんも高校慣れてきてるし、もうオレが見てなくても大丈夫だと思う。ツバメもわかってるから、高校さぼっても怒らないんだよね？」

汐音とツバメが人間界で暮らしているのは、この四月からの二カ月だけだ。ツバメの妹が人間界の高校に通うことになったので、汐音に見守りを頼んだのが発端だった。「オレもツバメも、そろそろ手を引いていいと思うんだよね。わざわざ無理して、人間界でお金を稼いで、人間のフリしてここに住まなくてもさ」

手洗いを終えた汐音はタライを玄関に立てかけ、布団干しにかけたハンガーに洗濯物を吊るす。洗剤を物置状態のトイレに片付け、ついでに外出用の学生服から白い寝巻に着替え、身軽になったように大きく欠伸をする。

その後、何かに気付いたように、眠るツバメの横を歩いてあちこち行き来していた。「これでよしと……うん、上出来！」

ドアのすぐ前の小さなキッチンで、何やらごそごそと何かをしている。それが終わると、今までタライのあった場所……ツバメの足側の床にちょこんと座り、壁にもたれて膝を抱え、まるでツバメを観察するような体勢をとった。

ここで少し、彼には現状への違和感があった。

けれどどうせ、結末に変わりはないだろう。彼が変えようと思わない限り、時雨を宿すツバメはその内、凶行に出る。

未だにその理由はわからないが、確かに何か、ざわざわとした胸の呻きが起き始めていた。ツバメに潜み、世界を傍観しているだけの時雨には、宿主の揺らぎはダイレクトに感情を侵されるものだ。ツバメが見る悪夢こそ、時雨という亀裂を起こすものに他ならない。

何をいったい、動揺しかかっているのか。汐音も汐音で、睡眠中という無意識の相手に、声をかけるのは危険なことだ。たやすく深層に踏み込む行為は、暴かれた闇の反撃を受けることくらい、人の心に付け入る悪魔ならわかっているだろうに。

外は一旦、雨が止んだのか、汐音が背にするドア側の窓がかすかに明るくなっている。これから朝日が顔を出すのに、眠りにつこうとしている二人。汐音は何を思ったのか、彼らの間では有り得なかった禁句を、そこで口にした。

「ツバメももう、元の世界に帰ってもいいかって、思っただけさ」

立ち上がった汐音は出窓の薄いカーテンを開け、窓枠に肘をついて背中を向けた。

「何で言い出さないのかなって。オレ、ちょっと不思議だったんだよ」

窓を開けてみたところで、外階段と隣の建物が見えるだけだからだろうか。うっすらと硝子に映る汐音とツバメを見ているように、汐音は窓そのものをぼんやりと見ている。

「こういうのってさ。きっと、人間から見れば、つまらない日常なんだろうけど」

汐音の声が祈るように、柔らかであるせいかもしれない。意味がわからず抵抗もできず、ツバメの焦燥だけが早まっていく。

「平和な目的のために、ただ平和に生きる。オレにはなかなか、できなかったよ」

それは紛れもなく、汐音自身も意外らしい、不意に表れた拙い望みだった。

「.....まだ終わりがたくない。ずっと続けばいいのに、なんてね」

起きているツバメには、直接言えなかったのだ。今まで何にも執着せずに、孤高に生きてきた悪魔が、おそらく初めて欲しいと思ったもの。

叶える気など、そこにはなかった。ツバメには帰る場所があり、この生活は仮初めのものだと、どちらも知っている。

ただこれまで、あまりに汐音が、幸薄かっただけだ。こんな何でもない共同生活を、得難いものと感じてしまう程に。

ツバメは違う。養子先もそもそもの家族も、ツバメを守ろうと誰かが傍にいてくれた。だから汐音の孤独が居た堪れない。

時雨は違う。自ら闇に生きると望み、近しい者達から隠れた。そうでなければ、「燕雨になる」ことができないのだから――

何だ、と。わかってみれば、答は簡単だった。

これは仕方がない。この状況は、時雨にしか解決できない。

何処にも寄る辺のない化け物。悪魔を殺す悪魔の汐音。それは時雨の仕事と似ている。

化け物などいないことになっている人間世界の秩序を守り、「神」や「あやかし」たる神的存在を、管理するのが時雨の役目だ。数多の時空を通り雨として渡り、現在ツバメの内に間借りするのも、この二人の異界の化生が監視対象だからだ。

「……………」

秩序を乱す化け物は狩る。平穏を望む悪魔など、最早悪魔ではない。それは悪魔たる事実に対する離反となる。大義としては弱い、管理者権限の行使を許される。今ここで、汐音を討伐しても、文句を言う輩はまずいないだろう。

彼に背を向けて、自らの思いがけない感傷に戸惑うように窓を見続ける汐音は、いつになく隙だらけだった。

まるで時雨に、連れて行ってほしいと願うかのように。

神も悪魔も、隠れたる存在という点で、本質的には大きく変わらない。違いはただ、「神」の力を駆るものは大なる神の一部に過ぎず、その名に課された御心には逆らえない。自らの意思よりも請け負った役割が優先される。

ツバメも時雨も、殊更に汐音を害そうとは思っていない。けれど時雨は、時雨である前に「管理者」に他ならない。あまつさえ、ヒトを救う「神」の一部であるのだから――

「……一緒に……来る？」

合理的であれば、その行動に彼らの意思など必要はない。引き攣れた微笑みを浮かべた時には、時雨の意識は無くなっていた。

After Domination

谷空木の桃色の花が、ぽとりと一つ、流し台に落ちた。
呼吸を殺し、気取られないよう起き上がった彼に、落花と同時に汐音が振り返った。
「アレ？ 寝てなくていいの、ツバメ？」
立ち尽くす彼を見て、にこにこ汐音は、開けていたカーテンをすりと閉める。
「何、ポカンとしてんの？ それと何で、チョーカー握り締めてんの？」
不思議そうに彼を一瞥しつつ、すりと横を抜けて、布団と平行に並ぶソファに座る。
これでは少なくとも、タライの場所を赤く汚すことは再現されない。帰宅からこちら、
同じように進んだはずの時間は、あっさり血の未来を塗り替えていた。

分岐の要因は簡単なことだった。黙ったまま彼はキッチンを横目で見て、何が運命を
変えたかをすぐに悟った。
「あ、その花、ドライフラワーにしてみよっかなって。作り方全然知らないけどね！」
流しの上の水切り棚に、彼の持ち帰った谷空木が、逆さまに吊るされている。これは
先の結末にはなかった光景だ。
入居時に使った荷造り紐を枝に巻き、細い金属パイプに括りつけてある。洗濯の後に
汐音がごそごそしていたのは、この作業だったらしい。

とりあえず彼は、苦しい一言しか口にできなかった。
「.....鋏。出したなら、元の所に直しとけよ」
いつもは彼の枕元に近い、壁かけに入れてある利器が、シンクの横に投げ出されたま
まだ。紐を切るのに使われたのだろう。
道理で、気配を殺した彼が小物入れから掴んだ凶器は、鋏に引っ掛けていたはずの
チョーカーだけになったわけだ。奇襲ができなくなれば、汐音はそう易々と殺せる相手
ではない。

恐る恐る鏡を見ると、彼の姿は、ツバメである金髪に戻っている。しかし、汐音が振り返った直後はどうだったのだろう。

今の彼は、銀髪でないなら時雨ではないはずだが、凶行に及ぼんとした胸の鼓動だけはありありと残っていた。

背筋が冷えて、薄い胸板から飛び出しそうに逸る身命の音。

無然としている彼に、ソファの上であぐらをかいた汐音が無邪気に微笑んでくる。

「悪い夢でも見た？ 最近よくうなされてるしね、オマエ」

「……」

これだけ近くで、汐音が先程の時雨の気配に気付かなかったことが有り得るだろうか。平和ボケにも程があるだろう。

そもそもツバメ自身が、自分と時雨の区別がついていない。悪夢の延長戦であるこの現実を、どうにも処理しかねている。

無言のまま、とりあえず布団に座り直すと、汐音がぼんぼんとソファの方から彼の頭を撫で叩いてきた。

「寝よ寝よ、気にしない気にしない。寝たら忘れるって」

「……って」

あまりに無防備に笑うので、さすがの彼も毒気が抜ける。

今更くるんとブランケットを羽織り、ソファの上で幸せそうに丸まった汐音に、余計なことを言わずにはおれなかった。

「起きてたなら……汐音は学校に行けよ……」

短いようで長い一時が、やっと過ぎ去っていた。そろそろ人間世界は本格的に始動する頃合いになる。

座り込んだものの、全身が落ち着かず二度寝できそうにないので、汐音が寝てから仕事に出ることにする。

まだ干されたばかりで濡れてないシャツは諦め、別に吊ってあった汐音の黒い上着を借りる。どうせ汐音は一日寝ているだろうし、今日は黒が着たい気分だった。

「あ……雨、やんでるな……」

そこでようやく、彼はほっとする。

これでもう、山科燕雨に戻ってもいい。ツバメに解けない問題の答を出すことはない。

外に出て階段を下りると、雨雲もひいて、雲間から太陽が顔を出していた。

血の半分は吸血鬼という化け物であるツバメには、日差しはあまり有り難くない。それでもずぶ濡れよりはましかと、彼にしては珍しいことを思った。

いつも仕事をする駅前に足早に向かう。途中で道路に突き出た谷空木が、いつにない黒衣のツバメを見送る。

帰りにまた、あの花を手折れば、雨も少しは遠慮してくれるだろうか。些細な花の有無くらいで、ヒトの運命などたやすく変わっていく。

雨降花という異名の木を、誰が教えてくれたのかは、今は考えないでおくことにした。



雨降花

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
